

中世・草戸千軒探検 ⑥

げた あしだ
～下駄の職人「足駄づくり」～

草戸千軒Ⅰ展示室は、“よみかえる草戸千軒”をキャッチフレーズに、今からおよそ600年前の南北朝時代を中心とする草戸千軒の町並みを実物大で復元したもので、博物館のメイン展示となっています。

前回から町家を一軒ずつ訪ねていますが、今回は塗師の隣、下駄作りの職人の家に入ってみましょう。

下駄を作る職人は、中世には「足駄づくり」と呼ばれていました。足駄づくりの家は、塗師職人の住む長屋の壁を隔てた隣にあります。

家に入ると、入り口から左側にかけてが土間になっており、ここにかまどを置いて台所として使っています。台所の奥には乾燥させた材木が積み上げられており、^{なた}で打ち割る作業も行われています。

台所の反対側には^{ゆか}床が張ってあり、下駄づくりの作業場と生活のためのスペースが続いています。作業場では下駄の台に^歯が差し込まれており、完成した下駄が次々と並べられています。作業場の右側の床には^{いろり}囲炉裏が設けられ、周りには夕食の準備が整えられています。



作業場と生活のためのスペース

草戸千軒町遺跡からも500点以上の下駄が出土しており、この町において最も一般的な履き物の一つであったことが明らかになっています。

この当時の下駄には「^{さしば}差歯下駄」「^{れんぼ}連歯下駄」の二種類がありました。差歯下駄は別の材で作った台に歯を差し込むもので、歯の高い下駄に向いています。連歯下駄は同じ材から台と歯を作り出すもので、歯の低い現代の一般的な下駄へとつながっています。

おや、足駄づくりの作業に見とれているうちにすっかり日が傾いてしまったようです。次は、道の反対側にある鍛冶屋さんを訪ねることにしましょう。



遺跡から出土した
差歯下駄



台所



囲炉裏端に用意された夕食



遺跡から出土した連歯下駄